

## ごっこ再考



神沢良輔

まだなんとなく肌寒い二月の下旬に、ある幼稚園の四歳児の保育をみる機会があった。

登園直後のこと、女児六名が、ままごとコーナーとその周りで遊んでいた。二名の女児はエプロンを着て、おもちゃの調理台の上で、野菜をこまかくきさんでは、ざるの中に入れていた。畳の上では、ロングスカートをはいた女児二名が、中央に食卓を置き、食器を並べて食事をしたり、ふとんの中に寝かせた人形の世話をしたり、交代にその中に入っっていっしょに寝たりしている。

さらに、ままごとコーナーの横に机を置き、二名の女児が並んでいすに座って、自分の作ったセロファンの花やお菓子などを並べて売っている。そして机の前を通る幼児たちに、「買って、買って」と口々にいうが、保育者以外は誰も買っくれない。

このようなごっこは、三、四十分以上も続いた。とても楽しそうだし、集中しているようにもみえた。しかし、よくみると、この二人ずつの三グループの女児たちは、ときどき顔を見合わせて話し合い、グループでままごとをしているようにみえるが、活動そのものについては、それぞれ全くといっていい程交流していない。しかし、二人ずつに分かれて遊んでいる幼児の間には、お互になんらかの役割をとっているのだらうと思ってみていたが、それもどうやら判然としないようである。

そのうちに、畳の上で遊んでいた二人の幼児は他の活動に移り、野菜を切っていた二人が、その後へ移動して、前の幼児たちがしていたような活動を続けてやっている。売っていた幼児たちの中の一人は、「ねこ」になって、マジックバンドを首輪にして、自分で自分の首につけ、立方体の遊具の中に入

ったり出たりしている。もう一人の幼児は、これをみながら、その横に坐って、絵本をみている。

この保育をみながら、「ごっこ」について、いまさらのように、いろいろのことを思うのである。

その第一は、もしこの活動を一日の指導計画に書くとしたら、どのように記したらよいかということである。遊びの発生からみると、ある意味ではきわめて偶然であり、しかも、自由に変化している。このようなことを、例えば「ままごつこをする」「売買ごっこをする」と書いても、それは、どうもそぐわないし、もう少し詳しく「仲のよい二人の幼児たちがグループをつくり、ひとりでするごっこを楽しむ」と書いても、それは実態のない、意味のないものになってしまうだろう。つまり、幼児の活動の遊び名や活動名で書くことの味気なさ、不正確さを感じるのである。ではどのようにすればよいかということが問題になる。

第二は、このように、一人ひとりの幼児が自分のイメージを投影してごっこをしているだけでは、「遊びの発展」がないし、指導がないのではないかといわれるかも知れない。しかし一般的にみて、同じ遊びをする人数がふえたり、共通のテ

ーマができたりしていけば、遊びが発展したという見方は、あまりにも短絡的であろう。ここにいる幼児たちは、一人ひとりが、自分のイメージをふくらませ、ごっこに没入し、楽しんでるのである。そこに、ごっこの本来の意味があるのである。

第三は、ごっこにおける「役割の分化」ということである。ごっこは役割をとってする遊びであるが、その役割は、一人ひとりの幼児のもっているイメージによってきめられる。それは、家族の役割（お母さんなど）、機能的な役割（売人など）、架空の役割、動物の役割（ねこなど）から選択されるし、これらの役割は共有されることもある。だから、ただある役割について分化させたことが、ごっこの発展ということにはならないであろう。

この他にも、ごっこのもつ問題はあるが、保育内容の充実や構造化という面からも、幼児の遊びの中心となる「ごっこ」について、もう一度考えなおし、その指導はどうあるべきかについて考えてみる必要があるであろう。

（十文字学園女子短期大学）